

2014年度

Women@JAXA

総集編



宇宙航空の未来を拓く女性たち

ロールモデル集



働く男女一人一人を尊重し、 役割と能力を 十分発揮できる環境へ

JAXA 理事長
奥村 直樹



JAXAは、2013年10月より文部科学省・女性研究者研究活動支援事業に参加し、男女共同参画を推進しています。「男女共同参画」というテーマは、JAXAだけの問題ではなく、世界共通の課題です。しかし、女性の活躍する場が諸外国と比較して限られている我が国では、特に重要な課題となっています。

男女共同参画の活動は、働く男女個々を尊重して、一人一人が高いモチベーションで、高いパフォーマンスを発揮できるような組織風土に変えていくことにつながるものです。この活動は、私の目指す「新生JAXA」の考え方に非常に近く、同じ方向を目指しているため、これからも積極的に推進していきたいと思っています。特に、「職場の活性化」と「家庭生活の充実」という2つの局面を重視しています。

2014年4月の時点でJAXA女性職員の管理職層の割合は約3%であり、まだまだ努力が必要な状況です。組織のマネジメントにあたる職員には、男女ともにそれぞれの職員の役割と能力が十分果たせるような、職場環境づくり、心配りと評価を推進することを期待しています。

また、家庭生活が充実しないと、仕事が十分にできるとは思いません。男女がお互いをよく理解し、助け合うことで家庭生活は充実します。また、子育て、親の介護という世代間の課題も共有し、共に解決していくという姿勢が重要です。ライフイベントへの対応、ワーク・ライフ・バランスが確保できる取り組みをより進めることで、結果として、JAXAの活動に貢献できるように、職場環境をさらに改善してまいりたいと思っています。

JAXA男女共同参画推進室について

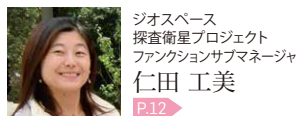
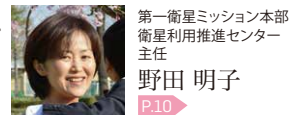
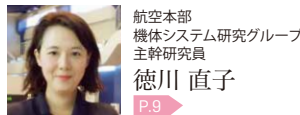
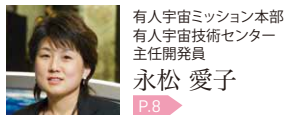
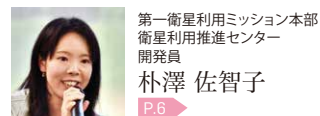
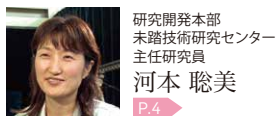
P.2

2013年10月に設立されたJAXA男女共同参画推進室の活動についてご紹介いたします。

ロールモデル紹介

P.3~13

JAXAの女性職員に自身の経験や考えを聞きました。仕事を続ける上でのモチベーションや、ライフ・ワーク・バランスの取り方は人それぞれです。宇宙航空の現場で頑張る女性たちの話が少しでも読者の参考になればと考えています。



JAXA男女共同参画推進室の取り組みの紹介

P.14

「女性研究者研究活動支援事業(一般型)」のJAXAでの取り組みについてご紹介いたします。

JAXA男女共同参画推進室について

平成25(2013)年10月より、JAXAは男女共同参画推進室を設置し、文部科学省「女性研究者研究活動支援事業」を実施する89機関の仲間入りを果たしました。当室では、宇宙航空分野における男女の十分な能力の発揮をミッションとしています。

これまで、ロケット開発、衛星運用、追跡管制、宇宙探査などの研究開発や技術の利用分野は、男性が中心の仕事とされてきたかもしれません。しかし、平成6(1994)年に女性として我が国初の宇宙飛行を実現した向井千秋宇宙飛行士を始めとして、宇宙航空分野で、いきいきと活躍する女性も増えてきています。

平成25(2013)年3月現在、JAXAにおける女性研究者の在籍割合と採用割合は8.7%、13.5%ですが、これらの数値を補助事業期間終了後の平成28(2016)年3月には12%以上、18%以上にすることを掲げています。また、JAXAでは、事務系職員も含む全職員を対象にした数値目標として、平成27(2015)年度末までに、女性管理職割合(3.4%)を10%に、役員割合(0%)を6%に増やすというゴールも定められています。女性割合の向上においては、単なる数字合わせのポジティブ・アクションではない、実力を伴うメリット・システムの構築が必要です。一方、女性の登用の重要な時期に、出産・育児・介護などのライフイベントが重なることも指摘されています。

このため、当室では、置き去り感や不公平感のない、ニーズに応じたきめ細かい支援を行うこととして、全職員を対象に(1)安心して出産・子育て・介護を行える環境の整備、(2)働き方の見直しによるワーク・ライフ・バランスの実現を推進いたします。また、女性研究者の支援として、(3)研究開発力・組織マネジメント力の向上と能力発揮、(4)採用・登用の拡大、意識啓発、(5)女性ロールモデルの見える化と女子学生・院生との交流機会の拡大を図ります。さらに、産学官連携や国際的な取組として、(6)内外連携の推進、相互協力ネットワークの形成を進めます。

本ミッションの達成は、JAXAのみの取組では実現できず、関係業界、地域、諸外国との密接な連携協力が重要です。宇宙航空分野で働くJAXAの女性たちの姿を知っていただき、ご関心をお寄せいただけましたら幸いです。

男女共同参画推進室長 塩満 典子



平成26(2014)年9月11日に実施したネットワーク構築のためのシャインウィークス・公式サイドイベント「女性が拓く宇宙航空の夢と未来」シンポジウム(開催場所:三菱みなとみらい技術館)の様子

ロールモデル

紹介

杉田 尚子

調査国際部 専門職 主幹

[ABOUT WORK]

文系出身でも活躍できる 宇宙の現場

JAXAの前身である宇宙開発事業団の内定を得た時、文系の私
が宇宙分野で何をするんだと父

は理解できない様子だった。私自身、典型的な文系の就職先であった別の内定先とも迷ったが、最後はおもしろそうなお仕事をしたいという気持ちで宇宙開発事業団に入社した。

文系としてどのような仕事に携わることができるのかという一抹の不安は、入社当時にあったものの、ふたを開けてみると、宇宙分野は国際関係、公共政策等の観点で取り組まなければいけないことが思いのほか多かった。日本人宇宙飛行士や日本の装置が関わるスペースシャトルが年に何回も打ち上げられた時期は、国際協定・渉外業務で忙しかった。環境問題などの国際的な課題に因應するため、地球観測の国際協力の枠組み作りに関わったことや産業界との連携強化は、それまでの宇宙のコミュニティを少しずつ広げる仕事だったと思ってい

[ABOUT LIFE]

仕事には達成感、 子育てには幸福感がある

入社から20年弱、多くの方々の努力でJAXAの知名度は昔と比較にならない程高くなった。その一方で、JAXAは新たな時代の中でその役割を模索し続けている。私自身はといえば、振り返ると、仕事という経験はさせていたのだという反面、まっすぐに進んできたという実感はまったくない。自分ではこれが大事だと思ってもなかなか芽が出ず苦悶することはしばしば、気がつけば、自分には絶対に向かないと思っていた博士課程に入った。育児休業で子どもとの時間は充実していたものの仕事上は3年のブランクがあった

りした。だが、信頼する人たちに相談をしながら、最後は自分で決断し、目の前にある小さなチャンスに望みを託していくうちに、それまでバラバラだったことがつながってくるようになった。そのような繰り返しだったと思う。

人生の大きな転換点となったのは、やはり子どもが生まれたことだ。子どもが生まれると物理的には自分の思い通りにならないことばかりである。世の親たちは、このような無私の精神で子どもを育ててきたんだあとと頭が下がる。だが、ある尊敬する女性の先輩が言った「仕事は達成感があるけれど、子育ては仕事にはない幸福感がある」ということも実感している。

[HOW TO OVERCOME]

語らえる親友と 励ましてくれる息子

日本は女性の社会進出が世界の中でもかなり遅れている部類に入る一方で、子どもの出生数も少ない。このような日本の現実を見ると、子育てをしたり、女性が働くこと両方共にしづらい何かがあるようだ。

そして子育てをしながら仕事をするのは並大抵のことではなく、毎日が綱渡りである。子育ては、長期的に子どもを育てようという人間に育てたいか、ということと同時に毎日目の前のことを確実に、物理的にこなさなくては

いけない。

一方で、今ある自分を考えた場合、仕事以外の新しい人間関係はほとんどが息子を通じた出会いであることに気がつく。頼りになるママ友、尊敬する学校の先生方、近所さん、皆息子が取り持ってくれた縁である。孫を心から可愛がってくれる両親や親戚のありがたさも身に沁みる。また、マネジメント力のある上司や頼りになる同僚に恵まれることほど、仕事と子育ての両立で助かることはない。そのようなありがたさも痛感するようになった。そしてもちろん、忘れてはならな

いのが夫の日々の協力。

行き詰まった気持ちになった時には、留学先で出会った仲間を思い出す。子育てが一段落して学校で学び直し、外交官と変わった女性。母国の人権弾圧や戦火を逃れて学びに来た人々も少なからずいた。このような人たちのことを思い出す度に、希望を持ち続け、自分の直面している現実など大した問題ではないと思ふ。お互いの境遇の変化に関わらず、語らうことのできる親友にも助けられている。

最近では、「仕事と子育てが大変！」と思った時には、息子に仕事のことを話すようにしている。

「今、仕事頑張っているつもりなんだけれどうまく行かないことがあつてね。」などと話すと、子どもはふつと大人びた表情で話に真剣に耳を傾ける。本当に疲れて瞬間仕事を辞めようかと思ふ息子にこぼしたこともあつたが、普段は能天気な息子が真剣な眼差しで「ダメだよ、仕事辞めちゃ。ご飯だつて食べられなくなるし、それに……」にかくダメだよ。頑張らなきゃ……と言ったのには驚かされた。

[FOR THE FUTURE]

男女共同参画への理解と 制度の拡充が大切

子どもに大きな負担となる転校を伴う異動があつた場合に仕事を続けられるのか、来年はJAXAで仕事ができるか、というのか、ということはしばしば脳裏をよぎる。「女性だから大変だった」と言いたくない」という気持ちはある。その一方で、子育てや男女共同参画という観点で「大変だけれども私ではできた」というのは、後進にとっては「苦勞の再生産」になるのではないかとも思っている。私自身周囲の理解や一昔前はなかつた育児

休業、フレックス勤務等の制度の恩恵を受けて、何とか挫折せずに仕事を続けてきたと思っている。やはり理解増進や制度の拡充は大切なことだと思う。

遠い将来、人類の歴史を振り返ると、私の生きた時代は「人類が初めて宇宙に進出した時代」と形容されることだろう。その中で果たした役割はごくわずかであつても、日本という国に生まれてこの一端を担うことができて光栄だと思つていて。息子は月を見る度に、いつか自分も行けるものだと信じている。個人の夢は誰もが宇宙に行けるよつになること、そしてさらに遠くの宇宙に行く能力のある国がその火を絶やさず歩み続けることだ。

Profile

【入社年度】1995年度 【雇用形態】常勤 【勤務地】東京
【略歴】一橋大学大学院法学研究科、ハーバード大学ケネディ・スクール修了。政策研究大学院大学にて博士号取得。宇宙開発事業団に入社後、海外との協定・契約業務、地球観測の推進等に從事。2013年4月より現職
【年代】40代前半
【家族構成】夫、子ども1人(息子)



[ABOUT WORK]

女性だからといって 仕事を制限せずに

研究開発本部 未踏技術研究センター 主任研究員

河本 聡美

JAXA統合前の航空宇宙技術研究所に入所して以来、小型衛星プロジェクトや月惑星探査等の研究にも参加しつつも一貫してスペースデブリ(宇宙ゴミ)に関する研究を続けてきた。具体的にはデブリが今後どのように増加していくか、宇宙機にデブリがどのくらい衝突して損傷を与える確率があるか等を解析するためのモデル・ツールの開発、すでに軌道上にあるデブリを除去するための研究に加え、デブリを軌道降下させるのに有望と考えられている導電性テザーシステムの実証実験プロジェクトの副チーム長を務めさせてもらっている。

調布の研究者や研修生たちと一緒に、自分で実験装置を作って実験したり、数値シミュレーションプログラムを開発したりと自由なアイデアで研究ができた上、提案した実証実験プロジェクトにも関わられるという幅広い経験ができ、私的の時間的制約にも理解ある職場で仕事を続けられたことに感謝している。

デブリ除去技術には多分野の専門家が必要であり、他部署や大学、メーカーの方々と幅広く仕事をさせていたに比べて、国際的なデブリの専門家の会議にも毎年参加している。世界のデブリの専

門家と議論し、JAXAのデブリ担当、あるいはデブリ専門家の仲間として認めてもらえるのは大変嬉しい。外国人は、女性だからと言って軽く見ることはないように感じる。会議後に「さっきはいい意見がありがとう」と話しかけてもらえたり、「彼女は非常にアクティブに研究しているんだよ」と紹介してもらったりした時、続けてきてよかったと思う。

大学までは男女差別なく教育の機会を与えられ、国立大学で税金も使って勉強させてもらったのだから、女性だから育児があるからと仕事を制限したりせず、そこで得られた成果を社会に還元して欲しいと思う。

[ABOUT LIFE]

子どもと離れる 時間があるからこそ

私が出産した10年前、調布には育児中の女性職員がおらず、仕事と両立できず、保育園でやっていたのが非常に不安だった。保育所不足の問題で長男の時は生後4か月、ゼロ歳児4月での復職しか選択肢はなかったし、次男の時は長男と同じ認可保育園に入るのは難しいかもしれないと言われ、産休中から認証保育園を確保して産休

明けで復職することになった。今振り返ると、それがとてもよかったと思う。

例えば、保育園での食事。家では親が食べさせてあげたくなってしまっ、スプーンを上手に使えない月齢でも保育園ではどの子も自分の力で夢中になって食べていた。手も顔も椅子の周りもすべて。正直、後の掃除があまりに大変そう。家でではできないな...と、思ってしまった。

保育園ではお友達と一緒に食べる楽しさを早くから覚え、おかげで我が家の子どもたちは、私や私の兄弟より何でも好き嫌いなくよく食べる子になり、私の母に感心された。またたくさんのお友達や大人と関わり、保育士さん手作りの工夫をこらしたおもちゃで夢中になって遊んだり、数々の行事を経験したりでき、静かなマシヨンの一室で私と二人きりで遊ぶより、はるかによい刺激を受けて成長したと思う。

私も自身も保育士さんたちとの交流にとても助けられた。長男は1歳過ぎてても全然歩かなくなった、一人で育てていたらどんなにか不安だったろうと思うが、保育士さんたちによくありますよ、大丈夫」と言ってもらえて救われた。今考えればそんなに思い悩むことではないようなことも、最初の子育てはとにかく不安に陥るものなのだ。

一人で子どもの面倒を見ていると、ちよと家事をしても子どもが泣くと中断してしまい、思い通りに時間が使えなくてイライラしたり、二人で不安を抱えて悩んだりすることもありますが、子どもと離れる時間があるからこそ、より愛しく楽しく子どもに接することができたと思う。

体力的には育児との両立は時間が足りなくて正直大変。週末もたままった家事があり、常に時間があれば...と思う。「暇」な時間、テレビを見る時間は全くなくなつた。仕事も、もちろん人間関係に疲れたり、うまく進められなくて落ち込むこともある。でも子どもと過ごしている癒やされるし、逆に、仕事中には、子ども関係のストレスから解放

される。

[HOW TO OVERCOME]

周囲の協力があれば 「なんとかなる」

私が仕事を続け、海外出張もできていたのは、職場はもちろん、夫や子どもたち、実家の協力があつたことである。夫は民間企業勤務で、同じ年だが管理職でプロジェクトのリーダーをしているらしく、私以上に責任ある立場で多忙のようである。でもなるべく早く帰ってきて夜中に自宅で仕事するなど、非常に協力的である。家事も料理も何でもできる。

スケジュールは常に確認しあい、この日この日はこっちが遅くなる日、とやりくりしている。子どもが病気になった時も同様で、私は何時からの会議は抜けられない、ここはずらされた、等で分担を決める。夫は私の気持ちかわからない、なんて愚痴は無縁の、信頼する同志であり、仕事に関する気持ちも理解できる。

我が家は長男が小学校に入るタイミングで、私の実家の近くに引っ越した。学童は保育園より早く終わるため一人で長く留守番させるのもためらわれたためだが、5年生にもなると、「祖父母の家で待っていて」と言っても、「家で一人で待っている方がよい」と言う。カキ管理等も大丈夫になってきた。会社を出るときに電話すると、「ご飯を炊いておいてくれたりもする。子どもの成長は早い。

まだまだ経験の浅い私であるが、子育てと仕事の両立に不安を感じている方には、「なんとかなる、大丈夫」と伝えたい。それどころか、新しい出会い、経験、今まで思いつかなかった思考など世界が広がり、時間的体力的には大変だけれど、精神的にはバランスを取りやす

すいと思う。

[FOR THE FUTURE]

何事もしなやかに 乗り越えていきたい

昔、他の分野で活躍している女性の先輩に、女性が少ない職場で今後いろいろな壁にぶつかるかもしれないけれど、しなやかに乗り越えてほしい、という言葉を見た。

私も今後子どもが大きくなるに従い新たな悩みが増えるだろうと思うし、介護等の問題も新たにでてくるかもしれないが、しなやかに乗り越えていきたいと思う。



Profile

【入社年度】1998年度 【雇用形態】常勤

【勤務地】調布

【略歴】東京大学大学院 工学系研究科 航空宇宙工学専攻 修士課程修了。

【年代】40代前半

【出身地】東京都

【趣味】庭いじり

【家族構成】夫、子ども2人(長男10歳、次男7歳)

[ABOUT WORK]

ロケットの歴史に関われたのが誇り

広報部報道グループ 主任 白石 紀子

入社してから10年11カ月間の輸送本部での経験は、とてもとても貴重なものだった。ロケットの仕事がしたい、そう思ってた。飛び込んだH-IIAロケット打ち上げ現場での経験。6号機の失敗。RTF7号機の成功。筑波でのH-IIA204の開発。民間移管。そして、H-IIBロケットの開発と発射指揮者として打ち上げた試験機。2号機。3号機。ロケット開発の現場で、素敵な仲間と困りあがり、一緒に仕事をした。いつも自分でできることを一杯やろう、そう思ってた。結果を精一杯やろう、そう思ってた。結果を日本に誇れることに感謝している。

広報部では全く違う世界が見えている。このような経験ができるのもJAXAの良さ。広い視野と総合的な判断力は将来に向けて必要なもの。1つの出来事をいろいろな視点で、いろいろな立場で考えられるように、その訓練が今の職場だと考えている。

博士号は、2013年3月に取得した。社会人ドクターとして母校の首都大学東京に在籍し始めたのは2009年4月。3年で取得できず、4年かかった。大学に所属していると言っても平日に講義を受講する必要はなく、週末や休日に解析した結果を教授と打ち合せて論文としてまとめた。テーマはハイブリッドロケット。

学位取得に対して恵まれていたのは、教授が週末も対応して下さったこと、宇宙科学研究所にハイブリッドロケットWGが設立され、そのメンバーに入れて頂けたこと、上司が学位の取得を応援しWGでの活動を許可して下さったこと。周囲の環境と支援に恵まれて、仕事をしながらでも研究をして結果を残すことができた。

私にとって研究は、常に頭に課題があつてその問題を解くようなもの。解析したり論文の執筆をするのは週末だがアイデアを考える時間は平日にもいくらかもあつた。アイデアは、仕事をして頭が活性化している、と浮かんで来たりする。それを集めて週末に整理してまとめ、教授とのディスカッションに望む。その繰り返しは、とても楽しかった。研究すると言うプロセスの経験を培えたことが今後につながる大きな成果だったのではないと思う。

輸送本部から広報部に異動するとき、ハイブリッドロケット試験機の打ち上げを広報面からサポートして欲しいと言われた。それは、私の広報部でのミッションであり、使命だと思っていた。

妊娠がわかったのは去年の8月初めのことだ。8月下旬には、ハイブリッドロケット試験機の打ち上げがあつた。新しいロケットへの国民の期待は大きくメディアの注目も高かった。そんな中、打ち上げに向けたプレスイベントの対応は私の仕事。週単位で内浦に出張し、現地での対応に走り回った。延期という壁を乗り越え、9月14日、無事に試験機の打ち上げが成功した。

出張から戻るたびに産婦人科に行き、胎児の無事を確認して、また仕事に没頭する。やるべきことが目の前にあるから、それをするのが優先だ。もともと大変な環境でも、人は子供を産み育てている。そう言い聞かせていた。打ち上げも終わり、しばらくゆっくりできると思いついた。10月中旬、2週間ぶりに行った病院で胎児の成長が止まっていることを知った。

12週を過ぎた胎児は人として扱われる。既に死んでいても出産して死産として死亡届を提出する。そうして、新しい命が消えてしまったことに気が付いた。原因はわからない。わからないからこそ、安静にしながら自分を責める気持ちにもなる。自分が優先すべきなのは、仕事なのか、子供なのか。二者択一の選択肢がその時にはあつて、選んだ結果は現実として重く深く心に残った。

[ABOUT LIFE]

仕事も出産もどちらも大切なこと

同じような思いを、他の働く女性に話して欲しい。仕事をするのも素敵なこと。子供を産むことも貴重なことだ。どちらかしかできないという制約など取り払えないか。それが今の私の男女共同参画推進室の活動のモチベーションになっている。

[HOW TO OVERCOME]

今の自分ができることを一杯やる

少しでも、今の自分にできることを



実行しようという気持ち。猪突猛進なところは否めないが、自分が自分らしさだと思つし、自分ができることを一杯やろうという気持ち。失わなければ、少しずつ成長して行けると思う。

[FOR THE FUTURE]

自分らしさを出せる職場環境をめざして

JAXAという組織は人で支えられていると思う。宇宙開発という挑戦を実現するには、ロボットには変われない人の知識と努力と情熱が必要だからだ。でも、このJAXAという組織は組織を構成する人のことを大切にしているか？ そんなことを漠然と考えていた。

男女共同参画推進室の活動と死産の経験は、答えになるヒントを私にくれた。人がらしく生き活きと働くためには、適切な環境と周囲の協力が不可欠だ。

人にはいろいろな時がある。がむしゃらに働ける時もある。できない時もある。人に与えられた時間をどう使うか、それがその人の生き方になっていく。仕事に情熱を注げることはとても素敵なことだと思つても、仕事に縛られ時間のほとんどをそこに費やすことが良い仕事を生み出すとは限らない。

効率良く仕事をして、時間を他のことにも使う。趣味、自己啓発、家族のため、子供のため、親孝行。自分がしたいこと、自分でなければできないことが、仕事以外でもそれをする。その人らしさを作り、人を成長させ、結果的に仕事にも良い変化となる。

そんな新しい好循環の取り入れは、世の中では既に始まっている。その変化をJAXAにも入れたい。変化を受け入れる環境と個人を尊重する職場雰囲気構築を少しづつでも進め、少しずつでも変化することを願つ。

女性には選択肢が多いと言われる。出産、育児など仕事以外のライフイベントを考えてのこと。でも、男性にだって選択肢はたくさんある。男性も女性も、たくさんある選択肢の中から、自分で選んで生きている。必要なのは、自分で自分らしいと思つ選択肢を自分の意思で選ぶこと。長い人生を終えるとき、精一杯生きたと満足できるかどうかは、毎日の小さな選択肢の積み重ねだと思つ。だから、人生の一時をこのJAXAで働けたことを良かったと思つ返せるような、そんな組織であつて欲しいと思つ。

Profile

- 【入社年度】2002年度 【雇用形態】常勤 【勤務地】東京
- 【略歴】東京都立科学技術大学(現・首都大学東京)力学システム工学専攻修士課程修了。博士(工学)。宇宙輸送システム本部 種子島宇宙センター 発射管制課/H-IIAプロジェクトチーム/H-IIBプロジェクトチームを経て、2012年11月から現職
- 【年代】30代後半
- 【出身地】東京都
- 【趣味】テニス、ハンググライダー、スキー
- 【家族構成】祖母、母、夫

[ABOUT WORK]

入社1年目から 衛星の世界へ

第一衛星利用ミッション本部衛星利用推進センター 開発員

朴澤 佐智子

入社して1年目から技術試験衛星Ⅷ型「きく8号」(EIS-Ⅷ)と超高速インターネット衛星「きずな」(WINDS)の通信実験及び利用促進を担当した。入社1年目の終わりに、第1級陸上無線技術士の資格を取得。さらには同時期に「きずな」の打ち上げ業務に携わり、情報連絡班としてきずなプロジェクトマネージャのお手伝いをさせていた。きずな、種子島宇宙センターの管制室からH-IIAロケット14号機の打ち上げを見守った。

入社2年目の27歳の時に第二子となる長男を妊娠・出産し、その後2年数カ月おきに、第三子となる長女(入社5年目)、第二子となる次男(入社7年目)を出産した。一般的に言われるように、20代後半から30代前半にかけては女性にとっての出産適齢期である。母体の産後における回復が早く、育児と仕事を両立する体力がある。特に20代の時は、子どもを寝かせてから家で勉強や仕事をして、夜遅くに就寝。その後、子どもが明け方に早起きをして、そのまま眠らなくてもなんとかか過せていた。休日も子どもと同じ目線で精いっぱい遊ぶことができた。そして、なによりも重要なのは、子どもたちの祖父母となる私の両親も若く、育児を手伝ってくれることが、私にも子どもたちにも嬉しかった。年齢の観点からは、若くして子どもを持つことが望ましいということをもっと体験した。

ただ一方で、仕事に関しては、本来ならば働き盛りの20代後半から30代であるはずが、私の場合は幼い子どもを養育しながら働くこととなり、仕事を制限せざるを得ず、やりきれない感が残っている。遠距離出張や夜間の業務は控え、子どもの突発的な発熱時には謝りながら退社をし(可能な限り夫と交代で対応、実験や打ち合わせが長引いてもシステムの不具合等の緊急事態が発生していても、夕方の保育園のお迎え時間には後髪を引かれながらも退社した。毎日定時に退社しななければならぬプレッシャーはものすごかった。時間との戦いをここ5年ほど続けた結果、時間内に業務をこなす効率の良さには自信があるが、研究

[ABOUT LIFE]

働き盛りの年齢と出産 適齢期が重なるジレンマ

や調べ物等という勉強の観点では不足を感じている。仕事を優先するか、出産・育児を優先するか、女性にとっては難しい課題である。このような経験を、これからの女性たちに対して、就職直後の年齢が出産適齢期と重なる現状をどうすれば解決できるのだろうか日々考えている。

[HOW TO OVERCOME]

仕事を続けるためにも 子どもは多い方が良い

私の産前産後は、体調がとても良好であったため、上司やチームの皆様にご配慮くださる中、可能な限り出張へ行った。海外にも何度か出張した。家庭の方は、私の母親、夫の母親、夫が交代で対応した。母親(私)が一人いなくなるだけで、家庭の方は人手が2人以上必要になる。仕事で例えれば工数が二倍であり、それだけ母親業務は大変だ。私の場合は家族の支援や、時には地域のファミリーサポート等を活用して乗り越えてきたが、もし家族の支援が得られない家庭の場合は、仕事と子育ての両立は相当困難であると考えられる。

[FOR THE FUTURE]

感謝の気持ちを子育て と仕事に還元したい

2014年7月で第三子の次男が1歳になった。保育園児が3人いて、しかも番下が0歳児という子育てで、繁忙しい一年間をなんとか乗り越えた。これからは、子育てが

中心だったところ5年間にはできなかった、勉強や仕事をますます頑張りたいと思う。私は一人でここまで来たのではない。学校の先生や、両親、地域の方々に育てられ、JAXAに就職し、現在に至る。これまでにお世話になった皆様に教えて頂いたことを育児にも仕事にも活かしていきたい。可愛い子どもを預けてまで、勉強をして仕事をやるのだから、これからも精いっぱい頑張つて子どもたち、ゆくゆくは孫たちに、おもしろい未来を築くことに少しでも貢献できたらと思う。

Profile

- 【入社年度】2007年度 【勤務地】筑波
- 【略歴】東京都立国分寺高校卒業。東京理科大学理学部物理学科卒業。東京大学大学院工学系研究科電子工学専攻修士過程修了。
- 【出身地】東京都
- 【趣味】旅行、映画、カフェに行くこと、寝ること
- 【家族構成】夫、子ども3人(長男5歳、長女3歳、次男1歳)



[ABOUT WORK]

醍醐味は、未開拓な領域での法制度づくり

内富 素子

総務部法務・コンプライアンス課 課長

宇宙開発事業団の存在を就活雑誌で知り、摩訶不思議な集団！と衝撃を受けて資料請求葉書を出したのが縁。宇宙は様々な側面があるので入社後興味があつた。どんな広がり、あつたという間に20年。入社後すぐ国際宇宙基地協力協定（IGA）交渉を担当し、IGA国会批准のためにできた外務省ポストに出向。留学を経て宇宙ステーションの法務を担当。利用促進の波が押し寄せ、一般向けの利用制度設計や試行プロジェクトを法務との兼務で担当。ポカリスエット宇宙

マシーナル、日清食品の宇宙食「ラーメンスペースラム」、宇宙下着、宇宙アートの公募も選定し実施担当をきつかけに、当時はニッチだった営業系業務強化に傾倒し、産学官連携部で宇宙オープンラボの立ち上げと初期運営を担当。久しぶりの法務復帰で、法務の面白さを改めて実感。宇宙は法的にも未開拓な領域なので、新たな法制度を構築するのが醍醐味。

JAXAは男女や上下の区別があまりなく、風通しがいい組織だと思ふ。自ら課題を発見し、ソリューションを提案し、実現している姿勢を常に持ち続けたいし、そのようなマインドの若手を育てたいと思ふ。

[ABOUT LIFE]

早い段階から人生をスマートにプロデュース

やむを得ず仕事関係を優先せざるを得ないことが多く、日々の生活のプライオリティは、①担当業務、②担当業務以外の仕事関連活動（東京大学非常勤講師（宇宙政策）、慶應義塾大学非常勤講師（宇宙法）、宇宙×芸術で社会を豊かにする有志コミュニティ beyond（発起人。理事長裁量経費）、学会活動（航空宇宙学会「宇宙ビジョン委員会」幹事）等、③自己啓発（中小企業診断士取得、国立天文台科学プロデューサーコース修了等）、④家族、⑤趣味、余暇となつてしまふ。仕事が好きなので、そのしわ寄せが家族に行く。タメ妻タメ母だけ、家族に人間としては尊敬してもらいたい。結婚するか、子どもを産むかの選択は個人の自由だが、子どもを産もうと思ふ女子は賢くライフプランニングをすべき（自分への反省点）。仕事に打ち込んでいるとほとんど時間がたつ。出産・育

児はフィジカルにもメンタルも想定外の大変さ。特に女子は、出産前後数年間戦力が落ちるのは事実。早い段階から自分の人生をスマートにプロデュースしよう。

私にとって子どもたちは、さまざまな気づきと癒やしを与えてくれるかけがえのない存在。一緒に過ごせる時間は限られるが、仕事にも打ち込み、メリハリをつけて子どもとの時間を楽しむのが私にはあつている。平日は、朝の保育園送りと早く帰れた時の寝かしつけ（絵本読み聞かせ）程度だが、子どもが寂しい思いをしていないか、表情などに気を付けている。

双方の実家が遠くて夫婦で乗り切るしかなく、毎日大変だが、ようやく子どもたちが落ち着いてきて、子育てを楽しむ余裕が出てきた。子どもたちも、0歳児から朝から晩まで保育園で一番長くいる「偉い子」だった。1歳になりたてから海外出張のたびに実家に長く預けたり、きつと大変だったと思ふ。たくましく育つてくれた子どもたちに感謝。

余談だが、長男長女の生来の行動の違いから、男女は違う生き物だと実感。長男は初めての育児の不安に加え、男の子の精神構造や行動が理解できず、精神的にきつかった（当時は「違い」を楽しむ余裕はなく）。下の女の子はぐっと案で、もつと一緒に過ごしたいと思つたが、0歳児でないと保育園に入りづらいし、そもそも1年以上休むつもりはなかつたので、7か月で保育園に入れて復帰した。

[HOW TO OVERCOME]

外力も活用すると精神的に楽になる

育児については、社会環境がいずれ整うのを待つわけにいかない。配偶者、実家、近所の友人、ママ友、ベビーシッター、家政婦ととにかく頼れるところをお願いして自衛し、毎日を乗り切るしかない。そのためにはネット

ワークが大切。特にストレスの多い乳児時代は引きこもりにならないよう、近所に共働き系ママ友を複数確保しよう。病氣・発育の不安時に相談できる友人（情報網）や比較サンプルは多い方がよい。私はマタニティヨガや自治体の親子教室で出産前にゲットした近所ママ友（産婦人科医含む）8名のマージングリストで常に不安や悩みを共有できるとも助かった。

配偶者や実家の支援は特に病児や長期出張の際に欠かせないが、お金で済むところは割り切つて外力も活用するとぐっと精神的にも楽になる。ベビーシッターはもちろん、家事サービスが有効。私は地元自治体のシルバー人材サービスで、掃除・洗濯・炊事（数日分の作り置き）を廉価でお世話になつている。子どもに泣かれても仕事を優先せざるを得ないことが多く、切ない思いをしてきたが、特に管理職になつた後は周囲に迷惑をかけないよう、外力の活用でなるべく定時帰宅日を減らし、柔軟に対応できる環境整備に努めた。私は古い時代の感覚がある世代だが、今は後にもっと多様な働き方の選択肢があるのだから。法務・コンプライアンス課は過半数が乳児を抱える「社会実験」課だが、皆が助け合つて頑張り、よい成果を出してくれている。

大切なのは、「思いをあきらめない」こと。産学官時代にスキル不足を痛感し、自己啓発で始めた投資した）中小企業診断士の勉強（経営コンサルタントの国家資格で、合格率約3%）。あきらめきれず長男の出産直後にフラフラの状態を受験し、二次試験合格は復職後。仕事・育児、勉強のトライアングルで、夜泣きの合間に勉強。長女の育休中も、東大非常勤講師として、出産1か月後から自費でベビーシッターを頼んで毎週講義に出た。い

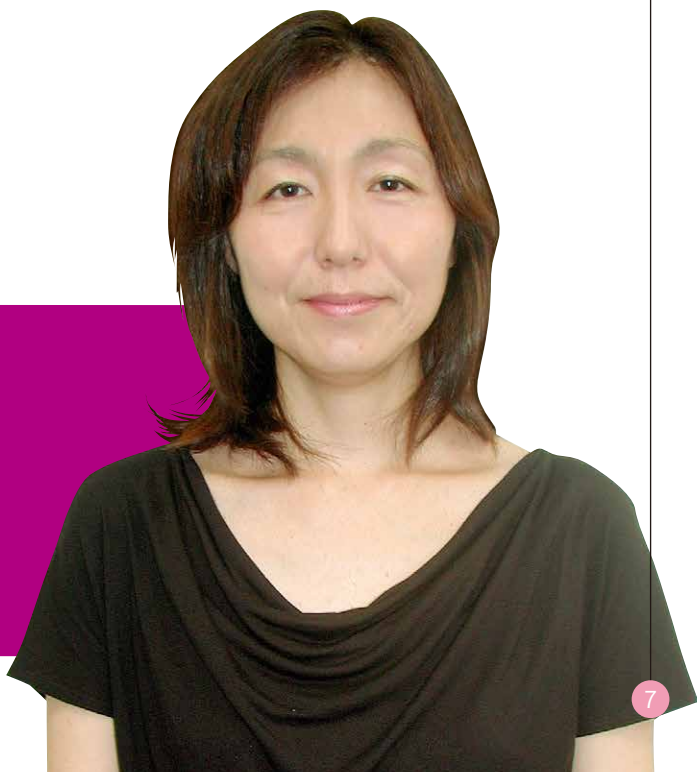
[FOR THE FUTURE]

焦点を絞って成果を出していきたい

やりたいことはつきないが、社会人の折り返し点。焦点を絞つて成果を出していきたい。ポストISSの有人探査協力の法制度構築と、産業振興へのリベンジ（産業振興制度構築と実践）が宇宙分野での私の夢。大学や学会などの教育、研究や、beyondなどでの社会貢献も、ライフワークとして業務の合間に息長く続けていきたい。子どもに言い聞かせている世界で一番素敵な言葉は「ありがとう」。忙しいと周りにあれこれ要求しがちだが、私も周囲や家族への感謝を忘れずに頑張つていきたい。

Profile

【入社年度】1994年度 【雇用形態】常勤 【勤務地】東京
 【略歴】東京大学法学部卒業。企画室、外務省国際科学協力室、オランダライデン大学（国際法修士）、宇宙環境利用推進部、産学官連携部、国際部を経て、2012年10月より現職。
 【出身地】埼玉県 【趣味】旅行
 【家族構成】夫、子ども2人（長男6歳、長女3歳）



[ABOUT WORK]

充実感のある 有人惑星探査に向けた 研究・技術開発

有人宇宙ミッション本部 有人宇宙技術センター 主任開発員

永松 愛子

宇宙開発に関する仕事をしようと決めたのは、小学生の時。両親と祖父母と一緒に種子島宇宙センター・内之浦空間観測所の見学へ行った時、日本人初の毛利・向井・土井宇宙飛行士が選抜されたことも、さらに宇宙への興味を強めたことなきをうけた。向井宇宙飛行士の「ライフサイエンス分野から有人宇宙開発に取り組みたい」という抱負は、そのまま自分の目標へつながった。

入社して16年、国際宇宙ステーション船内の最大の特徴である「微小重力」と「宇宙放射線」の両分野の業務を担当し、宇宙飛行士やライフサイエンス実験のための「宇宙放射線の被ばく線量計測」が現在の私の主担当業務だ。遮蔽や防護技術を睨んだ宇宙放射線研究・技術開発は、各国の宇宙機関が取り組む有人惑星探査のための重点課題のひとつだ。

2006年の宇宙放射線検出器の国際比較実験では、JAXAが開発した受動積算線量計PADL ETSとその自動解析システムが最も優れた測定精度を持つ宇宙用線量計として評価を受けた。日本を代表する放射線研究機関や共同研究者の方々と一緒に研究に取り組み、職場の支援に恵まれたことに

心から感謝している。業務の立ち上げから携わり、この分野が有人宇宙技術の発展とともに着実に育っている充実感がある。そして、日本の宇宙機関が担う本分野での役割の重要性も強く認識している。

ABOUT LIFE! JAXAの支援制度の 恩恵を受けて

産後すぐに復帰し、育児時間(30分×1回・日)を取得して、搾乳と授乳のためにお昼休みは保育園へ通った。子どもは、お腹が大きいつきから何力所も見て決めた24時間対応の保育園に預けた。大切な子どもを預けるのだから納得した所であれば、とこだわりがあった。出産当時は「きぼう」の搭載が目前に控えており、育児休暇で研究が遅れることは避けられた。

2005年、長男を出産して半年後、「総合研究大学院大学」へ入学し、業務の傍ら高エネルギー加速器研究科(高エネルギー加速器研究機構)で博士号を取得した。一般入試しかないため、他大学の学生や留学生と一緒に受験した。授業や演習の単位取得が必要だが、日中は業務がある。定時後や週末、夏季休業に

集中講義を組んでいたが、著名な教授とマンツーマンの質的な授業もあった。

所属長や上司の深い理解、素晴らしい指導教官との巡り合い、保育園の先生や父兄のご協力があったからこそ学位を取得できた。JAXAの学位取得支援制度の恩恵も受けた。

研究に利用する放射線加速器は昼間はがん治療に使われ、実験に使えるのは深夜の時間帯のみ。夫はH-IIAロケット射場作業のため数か月単位で種子島へ出張する。夫と私の両親共に遠方に住んでいるため急な支援はできない。夫と出張が重なることも多く、子どもは保育園にお泊まりすることも度々あった。自分の給与の全ては、大学院の授業料と保育園代、定時後の延長料金やお泊まり代になった。大学院2年目に次男も生まれさらに忙しくなったが、宇宙放射線計測を任ざられているという責任感とやりがいが勝った。

2008年6月に「きぼう」が打ち上げられ、さまざまな実験の運用が開始され、NASA、ESA、CSAとの実験運用を調整する業務に3年近く着いた。テレコンやS1Mがあり、週2〜3回深夜の時間を拘束される。テレコンは自宅で参加できるように配慮いただいたが、テレコン中に「ママ」と子どもが泣き出すことがしばしばあった。それでも上司の支援や同僚の協力のおかげで業務を全うできた。家族の理解と応援があり、保育園には家族のように助けてもらった。これらのどれかが欠けたまま大学院や運用業務があったとしたらできただろうか。これから出産や育児を迎える後輩の不安もよくわかる。

HOW TO OVERCOME! 取得しやすい制度と 環境づくりが大切

大学院や運用業務を通して、以下の気づきがあった。

・恩恵を受けた制度や仕組みは、諸先輩方が熟考し作られたもの。より良い制度にして後輩に手渡す。
・働くママやパパにとって本当に必要な支援は何なのか、その時代に合った次世代育成支援制度の充実や制度の取得しやすい環境づくりが必要。

2009年に労働組合の副委員長として次世代育成支援を主に担当した。職員からの意見を集約し、ベビーシッター利用補助制度の大幅な見直しを提案。「次世代育成支援に関するJAXA行動計画」の具現化や「JAXA筑波宇宙センター内の保育園設立」に実を結んだ。二入を集める、既存の仕組みを見直す、変化させ置き換える、成果を確認するというPDCAの繰り返し返しが大きな成果をもたらす。2013年に立ち上がった男女共同参画推進室の活動では、各事業所の職員がこの二入の集約に非常に力をいれている。

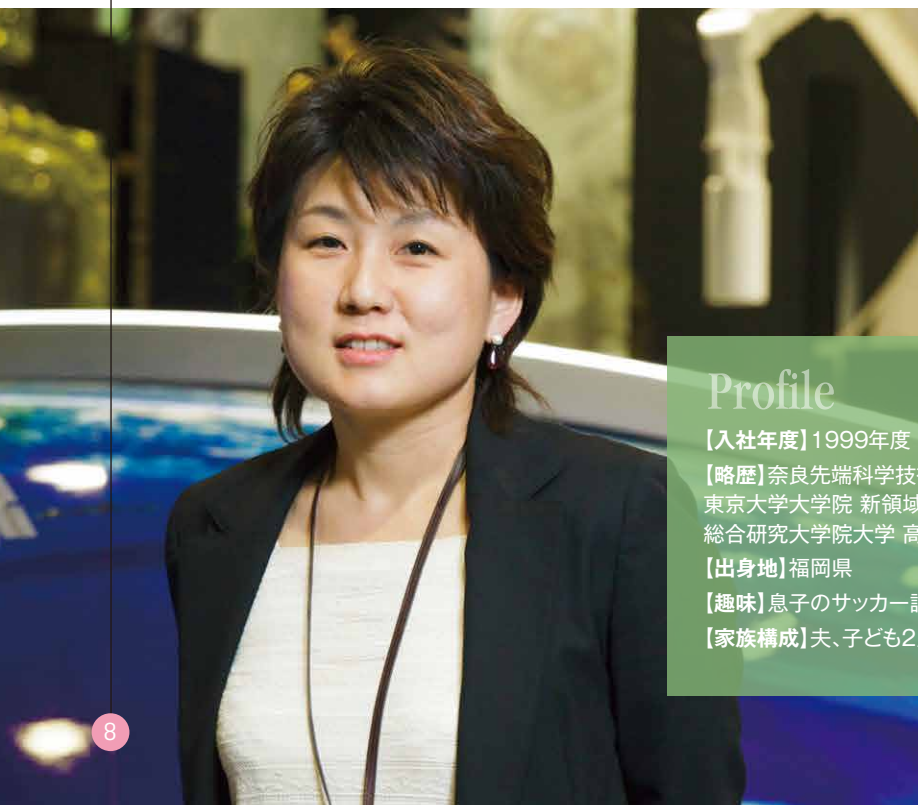
テレコン中に泣いていた息子たちも小学生になった。昨年、息子の小学校で「宇宙授業」を行った。「ママ頑張つて、授業聞いたからややつている仕事しわかかったよ。」「もっと勉強したらいいんじゃない?」「俺が(家のお手伝い)やつとくよ。大丈夫だよ、任せとけよ。」「子どもなりに応援してくれる。職場と家族に心から感謝している。

FOR THE FUTURE! 育児もキャリアアップも できる職場を後輩へ

子どもを抱えながらの出張や深夜の業務は、正直に言うとなかなか大変だ。それよりも子育ては相対的に楽しい、仕事のやりがいや達成感をはるかに上回る。

「カミさんに家も育児も全部任せてあるよ。」「遅くまで働く同僚や、「子どもって大変ですよ。私は仕事をしたかったので、子どもを持つつ

もりはありません。」「という女性の後輩職員。ESSAやNASAのママ職員も同じ悩みを抱えていた。子どもを持つか、仕事をとるかなんて悩むのはナンセンスだ。
今後若年層の労働人口は確実に減少する。出産や育児で一時的にキャリアダウンしてしまう女性職員や介護中の職員を避けて、男性職員だけでチームを構成することは不可能だ。今の制度や仕組みを少し変える、チームで仕事をフォローし共有しやすい環境をつくる、それだけで働きやすさはぐっと変わり、全力で成果を出せる。多様な働き方をすすめる職員を全員総力化でき、育児もキャリアアップも全部できる、そんな職場の雰囲気を後輩に手渡したい。



Profile

【入社年度】1999年度 【雇用形態】常勤 【勤務地】筑波
【略歴】奈良先端科学技術大学院大学 バイオサイエンス科博士前期課程。
東京大学大学院 新領域創成科学研究科 先端生命科学専攻。
総合研究大学院大学 高エネルギー加速器科学専攻 博士後期課程。博士(工学)
【出身地】福岡県
【趣味】息子のサッカー試合応援、川釣り、宇宙機関のママ友作り
【家族構成】夫、子ども2人(長男10歳、次男9歳)

[ABOUT WORK]

人生観が変わり、「仲間」と思える人が増えた

徳川直子

航空本部 機体システム研究グループ
主幹研究員

それぞれ研究テーマが異なる。またNASAに入ってから、最初は境界層の遷移機構に関する基礎的な研究をしていたが、小型超音速実験機NEXST-1のプロジェクトに携わるようになり、そして現在は機体設計を主軸に、とテーマが徐々に変化している。

研究テーマを変えてきたのは、自分の希望というより、その場所での求められていたことに応えてきた結果である。主体性がないようだが、自分がやりたい研究に固執するのではなく周囲から求められる研究に従事するという臨機応変な姿勢は、公的機関にいる以上義務のようなものでもあるし、自分の居場所を確保するという意味でも良かったように思う。十分な成果が上げられていくかは別として、周囲の要求に応えるよう努力してきたことが少しでも認められているとしたら、嬉しい限りである。もちろん、それができてきたのは、頼りない私を叱咤激励しながら育て、いろいろなチャンスを与えて下さった上司、同僚に因るところが大きい。また一緒に研究を進めてきてくれた歴代の研修生の協力も忘れてはいけない。この場を借りて感謝の意を表したい。

2つめのキーワードとしてあげたNEXST-1は、1997年から2007年まで実施された小超音速実験機(NEXST)プロジェクトの実験機である。JAXAで仕事をしていて最高に幸せだったのが、この超音速小型実験機NEXST-1の飛行実験に成功したときである。このプロジェクトには、境界層の遷移位置検出担当として飛行実験近くになつてから参加させてもらっていた。担当の計測器に不具合が続いたり、打ち上げ自体が失敗したり、と多くの苦難を乗り越えての成功であり、想定通りのデータが取れていた喜びはひとし

おであった。そしてこのプロジェクトでは非常に多くのことを学ばせてもらった。研究や業務という面だけでなく、人生観が変わった、と言つても過言でない。研究室で研究している時とは比べものにならないくらい深い人間関係や、仕事の責任によって、自分自身の可能性が信じられるようになったし、視野が広がったと思う。

また、「仲間」と思える人々が増えたことも大きな財産であり、大変幸せなことだと思ふ。NEXSTプロジェクトに関わったメンバーは、JAXA内に限らず、私にとっては「仲間」と感じる。それは、同じ「苦難」、そして「成功」という釜の飯を食ったからであろう。JAXAの中にも、プロジェクトに直接関わることや、研究を志す者もいるようだが、私は是非参加することをお勧めする。苦々しい業務においても心の支えとなるからである。

3つめのキーワードであるNASAとの共同研究は現在進行中である。言葉だけでなく文化の壁も厚い。思うように意思の疎通ができないし、メールのやりとりだけでは輸出になるため国内での共同研究とは異なることに気がつくなくてはならず、非常に面倒である。しかし、NASAの技術力にはかなわない部分も多い。

NEXSTプロジェクトと同様。苦勞したからこそ喜びもあるわけで、十分な研究成果あげたいと思つて日々頑張っている。研究期間が残すところあと1年を切った。NASAの技術を向上させることも、共著論文などのアウトプットも出していきたい。

私にとっては「職場」も「家庭」も共に「生活」の場である。だからこそ、その両立が悩みのタネだ。職場にいるときは仕事上の、課題、問題があり、それらの解決に向けすべきこと、しなければならぬことが山積している。さらには、した方がよいことも、自分が主担当でないがすべきこともある。だから、ついつい職場では「やらなきゃ」と思ってしまうのだが、部屋を出た瞬間に気がついた瞬間からは、家庭での問題、すべきこと、しなければならぬこと、した方がよいことが頭を駆け巡る。ほぼ毎朝「今日こそ早く帰ろう」と思うのに、帰宅時には「もっと早く帰らなければいけないがったんだ...」と心の中で後悔しながら自転車漕ぐ。

私だけではできないことが多く、職場では同僚、仲間に、家庭では保育園や学校の先生方や友人、そして家族に助けられ何とかやっていく。普段支えて下さっている方々には、ただただ感謝である。もう少し、「しなれば」に囚われないで気持ちを大きく持ち、イライラ、カリカリしないで生活を送れば、なお良いのであるが、「しなれば」という気持ちで仕事も家事も育児もしている、なかなかうまくさじ加減できない。このさじ加減こそが、私自身の一番の研究課題であるかもしれない。

謝である。

私にとっては「職場」も「家庭」も共に「生活」の場である。だからこそ、その両立が悩みのタネだ。職場にいるときは仕事上の、課題、問題があり、それらの解決に向けすべきこと、しなければならぬことが山積している。さらには、した方がよいことも、自分が主担当でないがすべきこともある。だから、ついつい職場では「やらなきゃ」と思ってしまうのだが、部屋を出た瞬間に気がついた瞬間からは、家庭での問題、すべきこと、しなければならぬこと、した方がよいことが頭を駆け巡る。ほぼ毎朝「今日こそ早く帰ろう」と思うのに、帰宅時には「もっと早く帰らなければいけないがったんだ...」と心の中で後悔しながら自転車漕ぐ。

私だけではできないことが多く、職場では同僚、仲間に、家庭では保育園や学校の先生方や友人、そして家族に助けられ何とかやっていく。普段支えて下さっている方々には、ただただ感謝である。もう少し、「しなれば」に囚われないで気持ちを大きく持ち、イライラ、カリカリしないで生活を送れば、なお良いのであるが、「しなれば」という気持ちで仕事も家事も育児もしている、なかなかうまくさじ加減できない。このさじ加減こそが、私自身の一番の研究課題であるかもしれない。

私だけではできないことが多く、職場では同僚、仲間に、家庭では保育園や学校の先生方や友人、そして家族に助けられ何とかやっていく。普段支えて下さっている方々には、ただただ感謝である。もう少し、「しなれば」に囚われないで気持ちを大きく持ち、イライラ、カリカリしないで生活を送れば、なお良いのであるが、「しなれば」という気持ちで仕事も家事も育児もしている、なかなかうまくさじ加減できない。このさじ加減こそが、私自身の一番の研究課題であるかもしれない。

私だけではできないことが多く、職場では同僚、仲間に、家庭では保育園や学校の先生方や友人、そして家族に助けられ何とかやっていく。普段支えて下さっている方々には、ただただ感謝である。もう少し、「しなれば」に囚われないで気持ちを大きく持ち、イライラ、カリカリしないで生活を送れば、なお良いのであるが、「しなれば」という気持ちで仕事も家事も育児もしている、なかなかうまくさじ加減できない。このさじ加減こそが、私自身の一番の研究課題であるかもしれない。

[HOW TO OVERCOME]

「娘たちの笑顔」と「睡眠」

日々の自転車操業を支えるエネルギー源は「娘たちの笑顔」と「睡眠」だ。
長女がまだ0歳であったとき保育園の担任の先生が「ママが元気が

ら何とかなる」とおっしゃっていたのと、娘を寝かしつけなければならぬ」ということを言い訳に、睡眠だけは十分確保している。職場でも、家庭でも、マルチタスクで要領よく多岐にわたる仕事をこなしていかなければならないが、眠いことにかく頭が動かない。

[FOR THE FUTURE]

世界中で利用される航空機技術を開発したい
将来の夢は、広く航空機に適用される技術を提供していくことである。

まずは、現在、主として行っている機体の自然層流設計によって燃料効率を向上させることが第一の希望だ。それ以外にも、世界中の人々の豊かで安定した生活に貢献できる技術を作っていきたいというのが夢である。例えば、災害時人命救助にあたることや、世界中で利用してもらえらるような航空機の開発に携われれば嬉しい。

Profile

【入社年度】1997年度 【雇用形態】常勤 【勤務地】調布
【略歴】学習院大学理学部卒業、東京農工大学大学院工学研究科博士後期課程修了。博士(工学)
【出身地】東京
【趣味】手工芸、歌舞伎鑑賞



[ABOUT WORK]

入社理由の一つは、男女の区別なく働けること

第一衛星ミッション本部衛星利用推進センター 主任

野田明子

私は高校生のころから、「男女が公平に働ける職場」で働きたいと思っていた。ウーマンリブに関する本を読みあさり「腰かけ就職」「就職」という言葉を知った。案の定就職活動では男女の差別をひしひしと感じた。NASDA(現JAXA)に入社した理由はいろいろあるが、「男女の区別なく働けること」は、一つの大きな理由だった。入社してからは衛星関係の事業推進部と契約部をほぼ交互に異動しながら、ALOS-2プロジェクトで楽しめ、チャレンジ的な仕事をやり、ALOS-2の運用・利用をするべく衛星利用推進センターに異動。

[ABOUT LIFE]

育児から始まった サバイバル生活

息子たちは、今年、小学校と中学校に入学し、夫は大学の教員である。傍から見れば幸せなエリート家族なのかもしれない。しかし、特に育児が始まってからは、毎日が限界の壁を超えるか超えないかのサバイバル生活を続けている。結婚が人生を変えるのとは言うまでもないことだが、「結婚」はよほ

ど旧態依然な考えの男性を選ばない限り、仕事を含めた生活を激変させるものではない。私は、「結婚は女の墓場」を座右の銘に、大学を卒業するまで彼氏すら作らなかったが、就職後、結婚をした。本当に結婚が墓場なのか確かめたくなったのかもしれない。結果、結婚は墓場ではなかったのでご安心あれ。

人生が一変したのは、子どもを産んだからだ。私は子どもを産み育てることは、みんながやっていることでも苦も無くできると思っていた。両親は共働きで私と兄を育ててくれたし、出産のために仕事を辞める気は微塵もなかった。しかし、子育てが生活や仕事のやり方を変えたことは私の想像を絶していた。

まず、子育ては私の自由な時間を容赦なく奪った。子どもの世話が生活の中心となり、常に私の視界の一部に子ども姿を追い、ひと時なりとも心が休まらない。トイレにいても、子どもは「ママ、ママ」とドアカじりついて絶叫し私を求めてくる。それでも、子どもは無条件に愛しく、面白いことも多いので、苦勞も楽しい。

仕事はいい気分転換。朝、保育園に預けて仕事を始める一瞬ほっとする。そして新たな戦いに挑む。なぜなら、保育園や児童館に迎えに行く時間は決まっているからだ。私の帰宅時間が遅くなることで子どもに淋しい思いをさせたくない。一方で、子どもがいから仕事ができないとは絶対に思われたくない。

だから、毎日ToDoリストを作り、時間を気にしながら目の前の仕事に猛然と取り組んだ。どうすれば仕事を効率的にできるか、アイデアを絞り出した。お迎えに時間が近づくとき精根尽き果てた。短時間でテキパキと仕事をこなし、残業代も請求しないのだから、いい労働者と評価されているはずだ。しかし、「早く帰る」「家庭の方が大事」「仕事への意欲がない」「大事な仕事をまかせられない」と周りの目がみていると感じることはしばしばだった。

JAXAでは、男女は平等に働いて、平等に評価されていると思う。しかし、「育児」の心配をせずに、時間を自由に使える職員が、残業もいとまず、「出す」「アウトプット」と「育児」と「家事」と「仕事」をこなすために、限られた時間内で「出す」「アウトプット」が平等に評価される。それだけではなく、職場文化という職員の深層意識には、残業や「持ち帰り仕事」を尊ぶ傾向がある。この「平等」は、育児する職員にとって不利に働くと私は考える。これはJAXAだけでなく、日本社会の問題だと思ふ。だから、日本の生産性はバケージョンを2〜3週間とり、残業が少ない欧米に比べて低いままなのだ。働き方に対する考えを変えれば、女性も男性ももっと生産的に仕事できるはずだ。

[HOW TO OVERCOME]

向上心も趣味も諦める必要はない

子どもとの生活が人生をより豊かにしてくれることは間違いないが、「育児」の大変さだけをみて「子ども」

を諦めてほしくない。私の場合、子どもが生まれる前から、夫は遠くの大学に勤務して別居をしていたので、育児と家事に夫の協力は少なかった。私の実家は宮崎だし、夫の実家も三重。祖父母の協力はほとんど限られる。このことでママ友達に愚痴を言う、「同居してたって、いないのも同然よ」と軽く返されることが多いので、残念ながら、私の状況がレアケースではない。そんな中で、なんとか私はサバイバルしてきたので、後輩の女性職員たちにも、何とかなると言いたい。

しかし、私のサバイバルよりも少し余裕を持った方がいいに決まっています。後輩には「パートナー」の協力を求めることを勧め、「育児」に非協力的な態度をとられるたびに、私は夫に対する「愛情」が冷めていくのを感じた。既婚男性に、妻の愛情をつなぎたいなら、「イクメン」になりなさいと言いたい。

そして「保育園」や「地域コミュニティ」という社会の子育て協力をもっと頼ることも大事だ。育児に悩んだときには、保育園にいろいろアドバイスを求めた。また、出張や外勤で帰りが遅くなる時には、夕方、仲良しのママ友が保育園から自分の家まで私の子どもを連れて帰ってくれて、子どもの面倒を見てくれた。さらにママ友達は、どんな宿題が出ているのかとか、しつけはどうしているのかといった有益な情報をくれる。もちろん、もらうだけでなく、地域コミュニティに貢献することも忘れてはならない。私は、PTA副会長や子ども会会長も務めた。

向上心も趣味も諦める必要はない。私は仕事と育児をしながら、社会人入学で大学院に入り「博士号」を取得したし、趣味のテニスも続け、少しずつ試合にも勝てるようになっていく。ただし、普通にやる

より少しばかり大変なので意志を強く持つことは必要だ。

[FOR THE FUTURE]

我慢を少しやめて、ワークシェアリングを!

これから、子どもの入試、就職、そして結婚と悩みは尽きないだろう。そろそろ年離れた両親と夫が頻繁に体調を崩すようになっていくので、次は介護が待っている。これからの苦難をより楽に乗り切るには「女性」だから我慢してはいけないう。でないと「育児」に加え「介護」の負担も女性に降り掛かるかもしれない。「男性」であることが楽な人生だとは思わない。男性は男性ならではの何かを「我慢し」、「悩み」、「戦つて」いるのだらう。全てとは言わないが、「我慢」をやめて、ワークシェアリングしてはどうだろうか。そうすれば、「女性」も「男性」もより生きやすくなる社会が作れると信じている。

Profile

【入社年度】1993年度 【雇用形態】常勤 【勤務地】筑波

【略歴】早稲田大学政治経済学部(政治学学士)、Imperial College, London University(長期派遣研修:環境工学修士)、名古屋大学環境学研究科(社会人入学:環境学博士)

【出身地】宮崎県

【趣味】家族でテニス、つくば市の研究所めぐり

【家族構成】夫、子ども2人(長男11歳、次男7歳)



[ABOUT WORK]

補完・補強しあう 組織運営を心がける

セキュリティ・情報化推進部 情報化基盤課 課長

田村 まさみ

大学時代は電子部品を専攻しており、情報システムはついでにという感じだったが、入社から現在に至るまで、情報管理及び情報システムに関わる業務に従事している。情報技術の世界は動きがとても速く、常に新しい技術動向を把握する必要がある。その点では毎日が新しいこととの連続である。ここ最近では、セキュリティなどで大変なことが増えているが、充実している。また、情報技術の活用を検討する時や新システムを導入するときには、「誰が、どのように使うのか」「活用することによる効果は何か」という視点が不可欠である。JAXA内のいろいろな部

門と議論し、実際の業務から新しい仕事の仕組みを作りあげていくため、実は、JAXAの中で一番いろいろな部門との関係があるのも、この仕事の面白いところである。自分自身は、一般的な男性管理職と比べて、産休や育児中ということで異動も少なかったことから、経験した業務の種類や部署も少なく、マネジメントスキルで不足しているものも多いと自覚している。常に周りの意見を聞き、お互いに補完・補強しあう組織運営を心がけ、共に働くメンバーが楽しく生き活きと仕事ができる環境を提供するよう意識している。

[ABOUT LIFE]

夫の協力、上司や同僚の理解が心の支えとなる

入社翌年に結婚し妊娠。当時は、女性職員も少なく、育児休業制度も育児短時間勤務制度もなく、出産後も仕事を続けていた先輩は1人だった。その先輩に、「いろいろな大変なこともある。でも、これからの後輩のためにも出産後も仕事続けてほしい。一緒にがんばろう」と背中を押され、長女を出産し産休(2カ月)後に職場に復帰した。そして、1994年に3人目の長男を出産。この時やつと育児休業の制度ができたが、取得している人はほとんどなく、育児休暇を取得するか悩んだ。しかし、出産が10月ということもあり保育所に入所できなかったため、翌年の4月に保育所に入所できるまでの3カ月間で育児休暇を取得した。3人の子育てをしつつ仕事を続けられたのは、家庭と育児に協力してくれた夫と、業務を分担してくれた同僚に恵まれたことも大きかったと思う。育児時間の短時間勤務制度もない時代だったので、産休中に異動の辞令が出たり、保育所のお迎えに間に合うよう途中で仕事を切り上げたり、残業も出張もできないということもあつた。そんな時、夫の協力や育児中の部署の上司や同僚の理解と配慮は、非常に心の支えになっていた。

[HOW TO OVERCOME]

休日には気分転換を心がける

子供が独立した今は、子供のペースを気にしなくてもよくなり、自分のスケジュールで動けるようになった。そのため、ここ数年は仕事に比重が偏つてしまい、ワークライフ・バランスが崩れていると感じている。子育てをしている期間は、仕事が子

[FOR THE FUTURE]

自分が受けた支援を後輩に返していきたい

子育てと仕事を両立することは、本人はもちろん、家族も同じ職場の上司や同僚もそれなりの負担がある。いろいろな面で悩んだり犠牲にしなければならぬ事はあつたが、子育てを通して、家庭面でも仕事でも得られた事が多かったと実感している。だから後輩の方には、「子育てでも仕事も、とりあえずチャレンジしてみよう」と言いたいかもしれないが、与えられた状況の中でも常にポジティブでいるように努力することが、自分を大きく成長させる糧になり、新しいチャンスにも繋がる。JAXAの制度等は、自分の子育て時代に比べると充実しているが、制度を活用していない人や経験のない人の意識はあまり変わっていないように感じる時がある。これから制度を活用する職員や育児休業から復職する職員は、いろいろな意味で不安を抱えていると思うので、制度の充実とともに意識改革への取組みも力を入れる必要があると感じている。出産や子育てだけでなく、さまざまなライフイベントに直面した時に、相互で助けあえる職場環境であれば、女性も男性も生き生きと仕事ができるのではないかと思う。

これからは、自分が受けたいろいろな支援を後輩に返していきたい。



Profile

【入社年度】1985年度 【雇用形態】常勤 【勤務地】筑波
 【略歴】入社後、計算センター、技術研究本部を経て、2003年から高度情報化推進部(現部署の前身)に所属し、情報管理及び情報システムに関わる業務を担当。
 【出身地】茨城県 【趣味】読書、華道
 【家族構成】夫、子ども3人(3人とも社会人)

[ABOUT WORK]

自分の経験を活かして 少しでも貢献したい

ジオスペース探査衛星プロジェクト ファンクションサブマネージャ

仁田 工美

私がJAXAに中途採用で入社したのは39歳の時である。大学卒業後に電機メーカーに就職し、その仕事を辞めて大学院に在学した後、第二の就職活動を行った。

電機メーカーに在職中、結婚と出産を経験し、十年以上勤務した後、自分の将来展望が見えなくなると退職した。大学院の研究室の教授が紹介してくれた宇宙科学研究所を含む大学のポストも、助教として採用するにトウが経ち、実績もあり過ぎると体よく断られた。夏に外資系メーカーの採用面接を受けたところ、博士の学位など必要ないから来月から来てくれと言われ、さぞかしうれしく、と考えていた時の事だった。

学会活動で何度かご紹介したNICT(情報通信研究機構)の女性の先輩が、ロボットのポストの募集があるから受けてみたら、と声をかけてくれたのだ。専門は電磁界というキーワードが一致するだけ、私は経験のほとんどないEMC(電磁環境適合性)の分野だった。案の定、面接時に、君の専門分野とは異なるよ、と言われる。その面接官が君みたいな人をJAXAで探しているから受けてみたらどうか、と言いつつ、JAXAってなんだよとか、逆に質問した。ちよと考えれば、宇宙科学研究所がJAXAの組織の一つと

思い浮かんだかもしれないが、当時の私には全く見えず知らずのところに思えた。

JAXAのホームページを見てみたら、と言われるままに中途採用を確認したのが締め切り1週間前。書類選考に通って、筆記試験を受けることになった。受験者は皆宇宙業界の知り合いのようで、気後れしたことを覚えている。その後の面接で、宇宙の事を全く知らないようだが大丈夫ですか?と聞かれたものの、採用していただき現在に至る。

JAXAに入ってから十年余りはない。その前の人生と同様、貫性のないものだ。最初に配属されたときは電源グループでは、衛星に関わる物性データの習得ではJAXAにおける礎を築けたと思う。最後は諸般の事情により手を離さざるを得なかったものの、可能であればまた研究をしたい分野であり、国内外には未だに私の研究を評価し、応援して下さる方々いることは有難いことだと感謝している。

調布での1年半は、研究推進部でJAXA全体の研究を俯瞰する仕事に従事し、宇宙や航空に関しては勉強をさせていた。たく機会にもなった。経営層の方々と日常的に関わる仕事を経験でき、間近で見

聞き出したことが今後の人生に活かせればと考えている。未踏技術センターではテプリ除去に関わる仕事に僅かながら携わらせていただき、新しい仲間を国内外に得た。十分な貢献ができず、仕事途上で異動することになってしまったが、未だに細々とテプリ防護の仕事に関わらせていただいている。この時の縁あつてこそ、海外の学会のテクニカル・ミニ・セミナーにアジアから2人だけ選ばれたのも調布での仕事を評価いただいたからだと思つ。相模原の衛星プロジェクトに配属されて2年余りが過ぎた。自分の今までの経験を活かしていかない、という忸怩たる思いがあるものの、チーム内外の仲間を支えられ、何とか少しでも貢献したいと考えている。

[ABOUT LIFE]

大変な思いをさせたが ほぼ皆勤賞の息子

子どもを産むということは私にとってチャレンジだった。良い親になれる自信もなく子どもがかわいと思えるとも全く思わなかったからだ。人生において子どもが無とは喜び、悲しみ、楽しみ、苦しみの振幅の幅が大きい小さいかの違いはないかと今は思う。

前の会社の育児休業中に、研究留学の保育園はオランダの無認可保育園であつた。慣れない場所で、ギャンギャン泣いていたのを思い出す。言葉がどうせ通じないから大丈夫だろうと思いつて行つた。短期間であつたが、強く願ひ、努力すれば、必ず支えてくれる人が現れ、思いは実現する、と実感できた貴重な時間であつたが、1歳になつたばかりの息子にも日本へ1人暮らしを余儀なくされた夫にも寂しい思いをさせた。

次の息子の試験は、私の大学院受験の3歳足らずの時であつた。私は十数年ぶりの数学・英語・専門分野等の勉強に必死となつた。一般入試での受験であり、筆記試験では、六割正答が必須

条件だったのだ。保育園、友人義母、母の手助け、夫の全面協力。おかげでなんとか合格できたものの、最初の1年間は会社を辞めることができず、さらに3歳になつたばかりの息子が入院してしまい、レポーターを書く、という生活であつた。大変さに比べるものはない、と今も思う。

会社での研究成果を使わず、1からの博士論文作成だったため、ちょうど保育園卒園が重なつた息子には、ここでも精神的にも大きな負担かけた。さらに、小学校入学と同時に私がつくばへの遠距離通勤となり、父子家庭と間違えられたのが今は笑い話である。3歳の時の入院を除くと皆勤賞の息子は、ぐれずによくここまで育つてくれたと思つ。

HOW TO OVERCOME!

子どもがいることを 言い訳にしない

子どもがいることを言い訳にしない、というのが私と夫の共通の課題である。そして、夫に言わせる、と、どんなに忙しい人でも3か月先の予定が埋まつていることはま

れだから、1年間の保育園行事、学校行事予定が4月に配布された時点でスケジュール調整をすればよいだけ、とのこと。とはいつもの、突然の仕事等に限らず、いつも現場で事件は起こるもので、息子が高校生になり落ち着いたが、これまで多くの人に支えられたと感慨深い。日本女性技術者フォーラムや電気学会等の男女共同参画活動で出会つた諸先輩方にもいつも励まされている。私が恵まれているとつくづく思つのは、夫が、「家事・育児に関して半分もできていないから、私に負担がかかっている」と認識していることだ。一方、仕事に関しては大変厳しい人なので、十年

経つて、同じ職位に留まっているということは、会社にとって必要ない人材という事だ、と叱咤、奮起を促されている。

[FOR THE FUTURE]

自分のやりたいことを 見つめ直したい

このまま順調にいけば定年まで十年となった。私の人生を振り返つてみると、好きを仕事に、とか、やりがい、という事を否定して、「ただ普通に働きたい」という気持ちだけで生きてきたように思う。必要とされる場で、と言えは聞こえが良いが、それで本当に良かったのかと考えるようになった。好き、で仕事をしている人は、視野が狭く、周りが見えなくなるといふ難点はあるものの、やはり、その道一筋の人には叶わないなと思つことも多い。今更には思つたが、今一度、自分のやりたいこと何なのか見つめ直したいと思つている。

Profile

【入社年度】2005年度 【雇用形態】常勤 【勤務地】相模原
【略歴】東京大学 工学系研究科電気工学専攻博士課程修了。
研究開発本部 電源グループ/未踏技術研究センター・研究推進部。
2012年10月から現職。
【年代】40代後半 【出身地】神奈川県
【趣味】読書、登山、レゴランドめぐり
【家族構成】夫、子ども1人(息子)



制度も職場の意識も両方大切

宇宙科学研究所
ASTRO-Hプロジェクトチーム

小川 美奈

私は、中学時代から宇宙に関する仕事に就きたいと思い始め、高校時代にブラックホールの物理や宇宙論に惹かれた。大学では宇宙物理学を学び、大学院時代には文部省宇宙科学研究所の受託院生としてX線天文衛星を使ったブラックホール候補の候補の研究を行っていた。就職先の条件は、宇宙に関する仕事ができること、結婚や出産後も長く勤められることだった。宇宙教育のボランティア活動で知り合ったNASA職員から、NASAの社内内容や待遇や制度に男女差がないことを聞き、NASAを志望した。それまでのNASAには技術系・事務系ともに修士以上の女性の採用枠がなかったことは知っていたが、ダメ元で人事部に手紙で問い合わせたら、今年から採用しますとのこと。

志望理由にも右記を書いておいたら、部長級の面接時に、NASAは女性職員が少なく、女性が働き続けるための制度が整っていないと思うのだが大丈夫だろうかと聞かれた。そこで私は先に就職した友人から聞いていた。新婚旅行から帰ってきたら辞表の様式が机の上においてあった。等の女性職員が結婚・出産後も働き続けているとOG訪問時に確認済みであることを伝えた。その上で、制度があっても使おうとしない組織もあるが、NASAは制度を使おうという意識がすてきにある、何か制度や規則が足りないのであれば必要に応じて作ってあげればよいのであり、制度よりも意識の方が重要だと思つたと答えた。

実際、初のプロパーの修士の技術系職員として採用され、女性開発部長(今の開発部長)として地球観測センターに着任して以来、いくつか制度等の改善が必要になった。配属先は、海外宇宙機関とのやりとりや科技厅からのリーグエント対応もあり、しばしば深夜業務が発生していたが、当時は、専門業務などの例外を除き女性の深夜勤務が法律により禁止されていた。以前から追跡管制隊では専門性が認められていたと聞いたように思うが、定常的に男性職員と同じ条件で働けるように、上司が人事部と調整し、開発部長は専門業務従事者として深夜業務に従事することができるようになった。そして、2年後に追跡管制隊中央追跡管制所に異動。部署名は何度も変わったが、14年半にわたって、人工衛星の追跡管制・軌道力学系システムの研究開発と、運用準備等を担当した。

結婚後は、旧姓を利用して続けるために別姓利用制度の必要性を訴え、出産後は日曜・祝日など一般的な保育園が休みの時間帯の追跡管制隊勤務に対応するための託児施設の必要性を訴えた。前者はすぐに実現したが、後者は「ほしのご保育園」として部分的に実現するまでに約10年かかり、衛星打ち上げの度に、衛星の状態により直前に変更になる勤務予定に合わせ保育を確保するのに四苦八苦した。

就職先は結婚式の翌週に筑波から関西に移転してしまつたため、夫が転職して関東に戻ってくるまで、育児は私と私の実家が担った。長男は3月生まれで、生まれたときには翌年度の認可保育園はまだ都内の実家に見つからず、産休明けで職場復帰した(筑波宇宙センター在勤)。11月に、実家の近くの民間保育園に空きができて入園、翌4月に実家近くの公立認可園に転園。お迎え、夕食、入浴は実家に任せましたが、何時になろうと毎夜実家に行き、朝起きて朝食、保育園経由で終わらない高速バスの最終便まで終わらぬ急ぎの仕事は持ち帰り、夜中に実家でこなし、都内との往復時間帯が主な睡眠時間という生活にも関わらず体力の限界は感じなかったが、筑波の宿舎と都内の実家の往復交通費負担に限界を感じ、数年後には実家のすぐ近くに引っ越した。

長女の妊娠時に、再び働き方を変えるを得なくなった。超音波検診で胎嚢と同時に、すぐ脇で出血しているのが見つかったのだ。出血領域が広がったから流産するので、おなかを張ったらずぐに体を休めなさいといわれたが、複数回のCDR(詳細設計審査会)準備中で休むに休めない。それまでは、力の限り、がむしやりに仕事に打ち込んできたが、体に負荷をかけたようだったので、仕事を続けられず、せつなく授かった新たな命を失ってしまった。困りきつて上司、同僚に相談したところ、上司をはじめ先輩ハハさんたちの対応は素早かった。あつという間に、執務室内の打ち合せエリアのソファに毛布と枕が運び込まれ、長い電話延長ケーブルで自席の固定電話が打ち合せエリアでも使えるようになった。幸い、出血は一ヶ月ほどでおさまったが、頻繁なおなかの張りはおさまらず、出産までずっとソファで休み休み勤務することになった。仕事と育児、介護のピークは同時にやってきた。十年以上携わってきた月探査衛星SELENE(かぐや)の追跡管制隊発足から打ち上げ、長男の小学校入学に伴ういわゆる「1年生の壁」、祖母(子どもたちの曾祖母)の頻繁な入院と臨終が、平成19年の春から秋に集中したのだ。給食の無い日は、慣れない弁当作りに四苦八苦。小学校は容赦なく平日真昼間に保護者出席必須の行事を設定してくる。学童クラブの父母会役員にもなつてしまった。深夜に実家に寄つたら祖母が苦しんでいて、救急車を呼んだこともあった。

SELENEのクリティカルフェーズは約40日と他衛星に比べて長くハードだったが、育児、通院、パートナーの出産等の事情を抱えている同僚も多く、それぞれ自身の事情を明らかにして、シフトの調整を行い、相互に協力して乗り切った。育児も介護も仕事も、相互の理解と協力が第一だと実感した。また、この時期を乗り越えられたのだからどうにかなるはず!と思えるようになった。

就職以来ずっと、深夜や明け方までの勤務が当たり前の生活だったが、長男出産後はそうもいけなくなった。夫の勤務先は結婚式の翌週に筑波から関西に移転してしまつたため、夫が転職して関東に戻ってくるまで、育児は私と私の実家が担った。長男は3月生まれで、生まれたときには翌年度の認可保育園はまだ都内の実家に見つからず、産休明けで職場復帰した(筑波宇宙センター在勤)。11月に、実家の近くの民間保育園に空きができて入園、翌4月に実家近くの公立認可園に転園。お迎え、夕食、入浴は実家に任せましたが、何時になろうと毎夜実家に行き、朝起きて朝食、保育園経由で終わらない高速バスの最終便まで終わらぬ急ぎの仕事は持ち帰り、夜中に実家でこなし、都内との往復時間帯が主な睡眠時間という生活にも関わらず体力の限界は感じなかったが、筑波の宿舎と都内の実家の往復交通費負担に限界を感じ、数年後には実家のすぐ近くに引っ越した。

命を失ってしまった。困りきつて上司、同僚に相談したところ、上司をはじめ先輩ハハさんたちの対応は素早かった。あつという間に、執務室内の打ち合せエリアのソファに毛布と枕が運び込まれ、長い電話延長ケーブルで自席の固定電話が打ち合せエリアでも使えるようになった。幸い、出血は一ヶ月ほどでおさまったが、頻繁なおなかの張りはおさまらず、出産までずっとソファで休み休み勤務することになった。仕事と育児、介護のピークは同時にやってきた。十年以上携わってきた月探査衛星SELENE(かぐや)の追跡管制隊発足から打ち上げ、長男の小学校入学に伴ういわゆる「1年生の壁」、祖母(子どもたちの曾祖母)の頻繁な入院と臨終が、平成19年の春から秋に集中したのだ。給食の無い日は、慣れない弁当作りに四苦八苦。小学校は容赦なく平日真昼間に保護者出席必須の行事を設定してくる。学童クラブの父母会役員にもなつてしまった。深夜に実家に寄つたら祖母が苦しんでいて、救急車を呼んだこともあった。

今の職場も、以前の職場も、共働き家庭であつてもなくても、男女ともに育児、家事に積極的に関わっている職員が多い。育児の話題が日常的に飛び交っている。育児に関する最大の情報源は職場だ。出産前後の注意点、保育園申し込みにおける優先度アップ法、ベビシッターや家事代行といった外力利用の勧めなど、たくさん情報とアドバイスをいただいた。子どもたちが大きくなった今でも、弁当作りのコツや受験など話題は尽きない。育児と仕事、介護を両立するためには、周囲の理解協力が重要だと思つた。お互いに相談しあえる人間関係はその前提条件だと思つた。

私たちの後には道はできる。必要なもの、足りないものは自分たちで用意する。そのためには、必要性を周囲に理解してもらつたことが必須であり、結局は、人と人のつながりが大事なのだと思う。

仕事に集中すること。
仕事のストレスはあまり感じないが、疲れた時には、子どもたちと一緒においしいものを食べ、遊び、ゆっくり眠ってリフレッシュすることにしていく。

【FOR THE FUTURE】
まず大事なことは、
相談しあえる人間関係

Profile

【入社年度】1992年度 【雇用形態】常勤 【勤務地】相模原
【略歴】立教大学大学院 理学研究科原子物理学専攻(理論物理)博士前期課程修了。
総合研究大学院大学 宇宙科学専攻博士後期課程在学中。
【年代】40代後半 【出身地】東京
【趣味】読書、宇宙教育ボランティア(日本宇宙少年団)
【家族構成】夫、子ども2人(長男13歳、長女10歳)



男女共同参画推進室の取り組みの紹介

～ 女性研究者研究活動支援事業【一般型】 ～

過去に実績のある取組を効果的に実施

平成25年3月時点の女性研究者の在職比率:8.7%、採用比率:13.5%

■ 具体的な取組

- A. 安心して出産・子育て・介護を行える環境
- B. 働き方の見直し、ワーク・ライフ・バランス
- C. 研究開発力・組織マネジメント力の向上
- D. 採用・登用を拡大、意識啓発
- E. ロールモデルの見える化
女子学生・院生との交流機会拡大
- F. 内外連携や相互協力ネットワークの形成

■ 実施期間終了後の取組

- ・ トップ主導による取組の継続と改善。
- ・ 自己資金の着実な確保と実施。

数値目標

達成のための方策

■ 採用・登用の目標

在職比率を12%以上	採用率・離職率の改善
採用者比率を18%以上	「同等の能力では、女性優先」の方針。支援環境・制度の広報。公募方法の工夫
教授相当者の採用(現状ゼロ)	募集/審査方法の工夫
子育て・介護による離職率をゼロ	支援体制・情報の整備

■ 研究開発力の向上

競争的研究資金獲得額を2倍以上	研修体系の強化、
論文投稿等の件数を1.5倍以上	メンター制度、セミナー等

その他、意識啓発、女性職員の人事制度理解の向上、人事プロセスへの参画促進など

機関全体の事業実施体制

事業所毎の特色と女性研究者のニーズと対応した支援／女性研究者の採用・上位職階での登用増加の取組／大学院博士課程に進む学生の増加の取組などを推進

